

Because I am a Girl

THE STATE OF THE WORLD'S GIRLS 2015

The unfinished business of girls' rights

世界ガールズ白書 2015 年版 サマリー **女の子の権利に関する未解決の問題**

「私の両親は、私に価値があると思っていないし、認めてもくれません。兄弟のことばかり褒めるのです」

15歳の女の子、ネパール

ネパールの15歳の女の子が発したこの言葉は、状況は異なっても、世界の数多くの国々で異口同音に聞かれる言葉である。女の子に対する「価値」の欠如こそが、何世紀にもおよぶ活動にもかかわらず、ジェンダー平等の達成を困難にしてきたのだ。女の子と女性の権利を守る法律や国際協定が策定されてもなお、有害な慣習や社会的期待のために、女の子は幾世代にもわたって「女の子がいるべき場所」に固定されてきた。

2007年、プラン・インターナショナルは「世界ガールズ白書」と題した報告書の第一弾を発表した。報告書の最初のメッセージは「年若く、女性であるという二重の危機により、女の子は不当な扱いを受けている」という、シンプルながらも力強いものだった。女性の権利と地位向上のための活動が実現してきた特筆すべき数々の成果にもかかわらず、長年にわたり世界中で何百万人もの女の子が貧困と不平等の人生を強いられているという揺るがぬ事実が存在するのだ。今では、女性は大統領にも首相にもなっており、大臣、科学者、芸術家、役者、経営者にもなっている。女性は国を動かし、企業を経営し、新聞社や大学のトップにもなっている。だが2014年現在でもカメルーンの女の子がこのようなことを教えてくれる。「女の子は、男の子や男の人の召使いみたいなものです。女の子の問題なんか、どうでもいいことなのです」。そして2012年にはまた別の女の子が、登校しようとしただけで、またそうする権利が自分にあると語っただけで銃撃されるという事件も起きている。

変化の速度

ミレニアム開発目標（以下、MDGs）の最終期限である2015年は、世界最大級の女性の会議であり、世界にとってジェンダー平等の決定的な転換点となった北京での歴史的な第4回世界女性会議から20年目の記念の年でもある。振り返ってみると、祝うべきことも当然あるが、同時に不満も残る。変化の速度が遅すぎることに、あまりにも断片的で不均等な対応に対しての不満だ。もちろん、進歩はあった。女性の教育が世界的に向上したため、この40年間で400万人の子どもの死を防ぐことができた（注1）。女性に配慮した憲法や法的枠組みも増えているし、出産が原因で命を落とす母親の数も歴史上のどの時点よりも少なくなっている。1990年と比較すると、妊産婦死亡率は50%近くも低下した（注2）。小学校教育を受ける女の子の数も、過去最大級に増えている（注3）。近年では、特に思春期の女の子が国際開発の場で注目を集めるようになってきた。子どもの早すぎる強制的な結婚や女性性器切除、ジェンダーに基づく暴力などの複雑な問題が、幸福や貧困削減の障害として認識されるようになるにつれ、政府や市民社会、民間企業はこれらの女性に対する暴挙の削減のために予算や人材を割り当て、政策に注力するようになってきている。

MDGsがその期限を迎えようとしている今、ジェンダー問題の改革を社会構造の基盤に正式に組み入れる新たな機会が生まれている。女性と女の子のエンパワーメントがもたらす経済的効果についての幅広い共通認識が生まれる中で、新たな「持続可能な開発目標（以下、SDGs）」アジェンダの中心にジェンダー平等を据え、ほかのすべての要素の原則としようという精力的な活動がおこなわれているのだ。貧困の根底にはジェンダーに基づく不平等と排除、不正があるという事実を認識したうえで新たな開発アジェンダが実施されることが、非常に重要である。不平等な力関係と差別的慣習との複雑な相互作用こそ、社会や地域における持続可能で倫理的な発展の実現にとってもっとも大きな課題なのだ。

「私たちが世界を変える」

今年、プランは世界中の多種多様な人々に対し、世界の女の子の現状を評価するという仕事を依頼した。作成者たちは必ずしもお互いの意見に同意するわけではなく、プランとも意見が一致するわけでもないが、そういった意見の相違や議論、楽観的意見や悲観的意見を捉え、さまざまな観点から世界の女の子の現状を見たいと考えたのだ。

参加してくれたのはジャーナリスト、詩人、政治家、活動家、ビジネスリーダー、経済学者、研究者など。その出身国もアフガニスタン、エジプト、エチオピア、エルサルバドル、グアテマラ、コロンビア、シエラレオネ、ドミニカ共和国、ナイジェリア、パキスタン、ホンジュラス、アメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダ、スウェーデン、フランスと様々だ。女の子の権利に関する未解決の問題に対して、様々な方法で、様々な人々が取り組んでいる。

パキスタン生まれの詩人イムティアズ・ダーカーは詩を、イギリスの作家ジョアン・ハリ

スは短編小説を、エチオピア出身のモデル、リヤ・ケベデは見開きの写真を寄稿してくれた。経済評論家カトリン・マルサルにはプランの世界ガールズ白書2009年版「女の子と世界経済」についての考察を依頼したし、大手食品・飲料会社トップのインドラ・ヌーイからも同じ題材についての寄稿があった。元合衆国大統領ジミー・カーターは男性や男の子との協働について語り、中南米で変革を主導してきた4人の少年たち、イェルシン、ケヴィン、ケンディル、エルマーもコメントを寄せた。マリアン・パールは国際的ジャーナリストおよび活動家としての経験を生かし、紛争地域の女の子に光を当てた。オーストラリアの元首相ジュリア・ギラードは女の子の教育に関して「多くの開発途上国における現実には、ジェンダー不平等が女の子の直面する数多くの障壁のうちのひとつに過ぎないということだ」と語っている。シエラレオネ生まれの若き活動家チェノール・バーは、女の子の教育が彼にとって今の時代における重大な世界的問題である理由を説明した。アニタ・ハイダリは彼女がなぜアフガニスタンで「Young Women for Change (ヤング・ウィメン・フォー・チェンジー変化を求める若い女性たち)」を共同設立したのかを鮮明に描き出す。ブッキー・ショニバレはナイジェリアでのソーシャルメディアを利用した活動「#BringBackOurGirls」について語り、カタリナ・ルイス＝ナヴァロはITにおけるジェンダー格差と、なぜそれが重要な問題かについて書いた。ナワル・エル・サーダウィは作家および活動家としての人生を振り返り、女の子と女性のための正義を求める長い闘いに費やした数十年の経験について語る。ジャーナリストで作家のサリー・アームストロングは今の若い女性の世代が持つ“困難を乗り越える力”と新鮮なエネルギーの強力な代弁者であり、変化の可能性については楽観的な意見を述べている。

寄稿者の多くが、歴史的に重大な変化をもたらすうえで今後数年が重要となると考えている。過去におこなわれたすべての努力が集結し、歴史上初めて、女の子と女性の権利を求める前向きな機運がすぐさま逆風に会うことのない時代に来ているのだ。2015年は約束に満ちた年であり、今度こそ、その約束は守られなければならない。

私たちこそ変化の世代

サリー・アームストロング、人権活動家、ジャーナリスト、アムネスティ・インターナショナル国際メディア賞受賞作家

さあ、女の子たちの入場だ。女性運動はもう過去のもので、若い世代は気にもしていないなどと言い張る悲観主義者諸氏にお知らせしたい。私は自著『Uprising: A New Age is Dawning for Every Mother's Daughter (立ち上がれ——すべての母親と娘たちの新しい時代の幕開け)』のためにアジアとアフリカ、ヨーロッパおよび南北アメリカで取材をおこなっていたときにそれを実感した。世界中に、誰の目にも映る純粹でまばゆい光をかざしている女の子と若い女性がいるのだ。彼女たちは、今まで誰も絶対に聞かなかった質問を

口にしている。たとえば「聖典のどこに、私は学校に行っちゃいけないって書いてあるの？」や、「これが私たちの文化だと言うなら、どうして私たちみんなに害をなすようなことをしているのか教えて？」といった質問だ。彼女たちは何世紀にもわたって女の子を押さえつけてきた、偽りの宗教的理由や文化的矛盾に立ち向かっている。それは、女の子の地位に関して地殻変動が起こり始めたからだ。強制的結婚や早すぎる結婚、セクシャル・ハラスメント、レイプ、暴力などの不当行為が過去の遺物になったという喜ばしい知らせが訪れたわけではまだない。だが男尊女卑や過激思想、原理主義、有害な慣習などが世界の人口の半分にあたる女性の健康と幸福に対する負の勢力であったことが証明され、その責めを受けるべきだという叫びは世界中で高らかに響き渡っている。何より、女性に対する不当行為はいまや、経済にも悪影響を与えるとみなされているのだ。専門家は、女の子と女性の地位が変わることで貧困が削減され、紛争が終結し、経済が好転すると主張している。今までは、性的暴力や強制的結婚のような問題について話し合うことはタブーとみられてきた。だが話し合わなければ、変えることはできない。

変化の過程は常に勇気をとめない、間違いなく時間がかかり、確実に費用もかかり、ときには悲痛な思いもしなければならぬものだ。だがいずれは歴史に残るような報いが得られるはずだ。私が話を聞いたある女の子はこう言っていた。「私たちが変化の世代なのです。私たちには力があり、新しい視点がある。私たちが世界を変えていくのです——見ていてください」

行く道を照らす

マリアン・パール、「チャイム・フォー・チェンジ」キャンペーン編集長、ジャーナリスト、作家

私は、さまざまな女性の姿を描き出すために18の国を訪れ、「チャイム・フォー・チェンジ」のストーリーテリング（物語）プラットフォームの編集長として働き始めてからは、幸運にもその女性たちの物語を伝える場を得ることができた。主に一人称で語られるこれらの物語が、女性や女の子たちが紡ぐ様々な歌によるパッチワークを作り上げていければと願う。

多くを経験してきた者は、英知の灯火となる。かすかに揺らめく光があちらこちらに輝き、自分自身の行く道を照らし、さらにほかの人々をも照らし出すように願っている。

今起こりつつある変化は女性と女の子が自らの人生、体、そして物語に対する権利を主張するという、まさに過去に例のない変化だ。マラウィのマーシイは、全国紙の一面を飾る物語を語ることで世間にカミングアウトした。その日の『マラウィ・ニュース』紙の一面トップの記事は「私はレズビアン」。マーシイは勘当され、家を追い出され、みんなから恥だとののしられた。それでも彼女は嵐を耐え抜いた。自分には性的指向を選ぶ権利がある

と、強く信じていたからだ。同性愛嫌悪の非常に強いこの国で、このような告白をした者はかつていなかった。イエメンでは10歳のヌジュードが連綿と続いてきた部族の伝統を破り、離婚を勝ち取っている。マララはすでに有名だが、コロンビアのマイエルリも、15歳のときに目の前で親友が銃撃されるのを目にしてから、暴力を撲滅するために子どものシンクタンクを設立した。それまでは麻薬カルテルの脅威、深刻な汚職、悪が罰せられない風潮の蔓延、ドラッグとアルコールが、諦めと暴力の平凡化につながっていた。

そこで子どもたちは砂場に集まり、暴力は家庭から始まるという認識にたどり着いた。彼らはまず親や地域社会に働きかけ、対話と相互理解の促進につとめた。彼らは、ノーベル平和賞の候補となった初めての子どもたちによる団体だ。このような無名の英雄たちが、自分らしく生きるという人間の権利への無条件の信条を武器として、何百万というほかの者たちのために道を照らすのだ。

私たちには新しい経済の物語が必要だ

カトリン・マルサル、スウェーデンの新聞紙『アフトンプラデーット』論説委員、『Who Cooked Adam Smith's Dinner? (誰がアダム・スミスの夕食を作ったのか?)』著者

毎朝家族のために15キロメートルを歩いて薪を集める11歳の女の子は、彼女の母国が経済的に発展する力を伸ばすうえで大きな役割を果たす。彼女の仕事の価値を認めなければ、何が経済発展をもたらすのかについての私たちの理解そのものが、間違ってしまうことになる。

フランスの作家でフェミニストのシモーヌ・ド・ボーヴォワールは、女性を「第二の性」と呼んだ。第一に来るのは男性であり、重要なのは男性だと言うのだ。彼は世界を定義するうえで女性は「他者」であり、彼ではない存在、だが彼が彼であるために依存している存在だと語った。

「第二の性」があるのと同じように、「第二の経済」というものもある。ここで、重きを置かれるのは伝統的に男性がおこなってきた仕事だ。女性の仕事が「その他」になる。男性がやらないが、男性が自分の仕事をおこなう上で依存している仕事なのだ……。

社会はすべからく、何らかの形で他者の世話をする構造を作り出さなければならない。さもなければ、経済どころか何一つ、うまくいきはしない。世話をしてやらなければ子どもは育たないし、病人は治らない。他者に世話をしてもらうことで私たちは協力、共感、尊敬、規律、思慮深さを学ぶのだ。

これらは、生きていくうえで必要な基本的能力だ。

欧米で既婚女性が職場に入るようになると、彼女たちは価値があるとみなされる仕事（家庭の外での仕事）により多くの時間を費やし、価値があるとみなされない仕事（家事）に費やす時間を減らすようになった。これにより、欧米社会のGDPは劇的に増加した。

だが、この増加は正確なものだったのだろうか？

家事の負担を定量化しようなどと考える者が誰もいなかったため、私たちは実際の富の拡大を過大評価してしまっていたのかもしれない。開発途上国でもっと多くの女性が賃金労働に携わるようになればどれだけ富が増加するかについて私たちが現在おこなっている計算も、同じ理由で間違っているかもしれないのだ。

私たちには、新しい経済の物語が必要だ。女性や女の子が家事労働を引き受けることで現在おこなっている経済貢献を無視することなく、変化の必要性を強調するような物語が。女性と女の子は、世界で未開拓の経済資源などではない。彼女たちが行う家事労働は、すでに社会と経済を支えている見えない仕組みなのだ。

だが、彼女たちは自らの意思でその役割を選んだわけではない。それに、その仕事の対価を受け取ってもいなければ、補償もされず、認められてもいない。これこそ、変えていかなければならない。

夢を見る勇氣

インドラ・ヌーイ、ペプシコ会長兼CEO

地球上の思春期の女の子5人のうち1人が、教育を受けさせてもらえずにいる。家族が学費を払えないから……売春宿に売られてしまったから……勉強する機会を与えるだけの価値がないとみなされたから……6200万人の女の子が学校に行けずにいる現状では、若い人々が持つ潜在的な可能性を解き放つことなど到底できはしない（注4、5）。

なぜなら実際には、若い女の子が大きな夢を抱くだけの勇氣を持っていたとしても、その夢が現実になる可能性はないからだ。それを現実にするためには、毎日毎日学校に行ける自由がなければならない。そして若い母親が少額融資で資金を借りられたとしても、事業を成長させられるだけの時間とチャンスがなければ意味がない。

女の子たちの想像力に限界があってはならないし、彼女たちがその夢を追いかけられるチャンスを手に入れるその日まで、我々は立ち止まるわけにはいかないのだ。

変化の主導者（チャンピオンズ・オブ・チェンジ）：中南米の若い男性たちの活動

「社会が僕たちに性差別主義者であれ、強くあれ、攻撃的であれと言います。でもそれは間違っている。僕にはそれを変える力があるんだと自分に言い聞かせています」

ケヴィン、16歳

「父が僕を叩いたのは、ほかに問題を解決する方法を知らなかったからだと思います。そういうふうに教えられてきたからです」

ケンディル、17歳

「男は強くなきゃいけない、泣いちゃいけない、感情を表に出しちゃいけないと言われてます。でも、正直言うと、僕は真剣に恋をしています」

エルマー、17歳

「ある先生が、僕たちはけっして尊厳を失ってはいけないと言いました。僕には尊厳があると感じるし、以前とは違う、自由だと感じられます」

イェルシン、17歳

女の子の教育は、現代のグローバル市民の権利問題である

チェノール・バー、グローバル教育の若き代弁者、人口評議会アソシエイト

私は、女の子が生きていくうえでは世界最悪の国のひとつと言われるシエラレオネで、2人の姉妹と一緒にシングルマザーの母親に育てられた。母は私がまだ幼いころに父と別れ、以来、小学校教師として働いてきた。母は教育を受けた人だ。だが母のような教師の給料は当時も今も、微々たるものだ。シエラレオネの女性が置かれた境遇を痛いほどよくわかってきた母は、やりくりするために持てる限りのエネルギーと創造力を駆使して必死に働かなければならなかった。教師としての安い給料を補うため、母は売れるものならなんでも売っていた。私たち3人の子どもの手も借りながら、自分で作れるものはパンやケーキ、パーム油まで何でも作って売ったものだ。そして教師であり、自分も多少は教育を受けていたこともあって、数々の困難の中でも（難民として命からがら母国を逃げ出さざるを得なくなりながらも）、母は教育の力をよくわかっていた。その点で、私は幸運だったと思う。教育の価値を理解していた母の力添えがなければ私は教育を受けられなかっただろうし、今ここにはいなかっただろう。これこそ、女性が教育を受けることが彼女の家族やコミュニティにどれだけの波及効果があるかを示す、いい例だ。

私が幸運だったのは、先見の明がある母に恵まれたという点だけではない。私は、男に生まれるという幸運にも恵まれた。私の2人の姉妹は、私が経験しなくてすんだ数々の困難に直面した。性的暴力の恐怖、たびたび接近してくる男たち、まだ幼いうちから申し込まれる結婚。成長するにつれ、彼女たちの人生が私の人生よりも重要性が低いのだと各方面から示唆された。彼女たちが私よりも賢いと、私はずっと確信していたのに。今にして思えば、どうしてそうなったかが理解できる。社会は私の姉妹たちのような女の子に対し、男に生まれなければ高い期待を持たれることはないのだと繰り返し教えこんできたのだ。彼女たちの将来の見通しは、昔も今も不利なままだ。

女の子の教育における課題

ジュリア・ギラード、オーストラリアの元首相、教育のためのグローバル・パートナーシップ（GPE）委員会議長

ほとんどの開発途上国における現実、ジェンダー不平等が女の子の直面する数多くの困難のひとつに過ぎないということだ。

貧困、障がい、民族、宗教、地理的条件（都市部に住んでいるのか、地方に住んでいるのか？ 家は学校から近いのか、遠いのか？）は、女の子が教育を受けられるかどうかを決定づける重要な要素だ。これらの要素を考慮しないことには、すべての女の子に教育を受けさせるという目標は、とうてい達成できはしない。

言い換えれば、地方に住み、民族的理由で虐げられている貧しい家庭に生まれた障がいのある女の子は、現状では小学校を卒業できる可能性すら事実上ないということになる。一方、都市部の比較的裕福な家庭に生まれた女の子にはもう少し明るい未来が拓けている。「万人のための教育（EFA）グローバルモニタリングレポート2013/2014」に記されているとおり、「近年の傾向がこのまま続くのであれば、裕福な家庭の男の子は2021年までに全員が小学校教育を終えられるだろうが、貧しい家庭の女の子が追い付くのは2086年まで無理であろう（注6）」

取り組みの焦点をただ女の子に当てればよいというものではなく、複雑に絡み合うニーズにも注意を払わなければならない。さもなければ、多くの女の子が貧しいまま取り残されてしまう。資金援助は子ども、とりわけもっとも支援が行き届きにくい女の子、地方に暮らす子ども、社会から取り残されたり障がいがあったりする子どもが学校に通うことを妨げているいくつもの要素に取り組むために使われるべきだ。

2015年末にミレニアム開発目標（MDGs）を引き継ぐことになっている持続可能な開発目標（SDGs）は、あらゆる教育段階の平等と万人のための教育という未完の任務を、とりわけ非常に貧しい子ども、僻地や紛争地帯、脆弱な地域に住む子ども、障がいのある子ども、そしてもちろん、女の子のために引き続き遂行していかなければならない。

だが、「あらゆる教育段階の平等」とはどういう意味なのか？ どういう状況になったら、そこに到達したことがわかるのか？ それは、すべての男の子と女の子が、質の高い教育を受けるべく学校に通えるようになったときだ。校舎の数が十分にあり、ちゃんと機能する、持続可能な教育制度が整備されている状態。適格な教師、特に女の子の成功には重要な役割を果たす女性教師の数が十分である状態。質の高い教科書やその他の教材が十分にあり、女の子が教育を受けられない理由の一つである経済的な障壁を取り除く、無料の学校がある状態。そして、女の子の教育が彼女たちの人格形成に欠かせないものであり、社会全体の将来の幸福にも必要不可欠であることを、家族や地域社会が理解した状態だ。

私には希望と夢がある

アニタ・ハイダリ、アフガニスタンの女性の権利活動家、Young Women for Change（ヤング・ウィメン・フォー・チェンジ—変化を求める若い女性たち、YWC）共同設立者

私は、公園に座って本を読める日が来ることを願っている。簡単なことに思えるかもしれないが、人生というのは簡単なことでできているものだ。女性に力のなさを感じさせるのは、ほんの小さなことばかりだ。アイスクリームが食べたいだけなのに、父親が帰宅して一緒に外へ連れて行ってくれるのを待たなければならない。一人で出かけてももちろんいいのだが、うるさい音や野次が何時間も耳に残るよりは、1人で出かけないほうがまだ。女の子や若い女性が、見知らぬ男につけまわされるという理由でもう学校に行けなくなったりすると、事態は深刻だ。そしてそれは、いつでも女の子のせいなのだ。

私は、今では友人たちと前よりも頻繁に会うことができる。私が働いていて、タクシーに乗ることができるからだ。5年前はこうはいかなかった。友人に会いたければ、父の帰宅を待って車で送ってもらわなければならない。女性が歩けないわけではないのだが、触られたり、悪態をつかれたり、じろじろ見られたりすることに耐えなければならない。それは簡単なことではないし、いつまでも続く終わりのない攻防に疲れてしまっていて、しまいにはまったく出かけなくなってしまう。だが私にとって、あきらめるというのは選択肢のうちには入っていない。

私には希望と夢がある。そして、その夢が現実になる日が来るとわかっている。すべての女性と女の子が母親だから、姉妹だから、妻だからという理由ではなく、ただ人間だからという理由で尊敬され、人間らしく扱われる日。人間として尊敬されるのは生まれながらの権利だ。女の子と女性の能力と技能、知識、そして意思決定力に対する尊敬を勝ち取ることで、これが、私たちのグループYWC（Young Women for Change）の存在意義だ。

この時代、最大の意義

リヤ・ケベデ、スーパーモデルでありデザイナー、母親のためのリヤ・ケベデ財団創業者

毎日、世界中のどこかの国で、ここに描き出すような若い母親が途方もない困難に直面している。だが彼女たちは未来がもっとよくなるはずだという希望と、驚異的な忍耐力で持ちこたえている。その希望を現実のものにするのは、今の時代に生きる私たちに課せられた最大の使命だ。

<カメルーン>

ファトゥと2歳の娘は、病院の敷地内に設置された難民センターでほかの5家族と共有しているテントから出てきた。ファトゥは、長い一日を生き延びさせてくれる朝食を求めて

いる。中央アフリカ共和国に住んでいた彼女の村が紛争に巻き込まれたとき、15歳の若い母親は逃げ出し、毎日暴力の恐怖におびえながら600キロの距離を徒歩で移動した。家族がどこにいるかはわからない。難民キャンプの診療所では、ファトゥのように居場所を失った女の子には不可欠な妊産婦ケアや小児保健サービスを提供している。

<ベトナム>

キィと夫は若くして結婚した。ベトナムの地方では、彼らのような十代のカップルは珍しくない。だが息子がまだ生後3カ月のときに夫が事故で死亡し、キィは両親のもとへ戻った。息子のチィを寝かしつける時間だ。キィは、夜息子と過ごすこの時間が大好きだ。日中は畑仕事をしてトウモロコシを植え付けたり野菜を収穫したりしていて、息子の面倒は妹のティエンが見ている。愛情あふれる両親ときょうだいたちに囲まれた自分は幸運だ、とキィは思う。だが、父親がいないまま育つことで息子にどんな影響があるのかも気にはなる。それでも「もう結婚はしない。生涯を息子のためにささげよう」と彼女は決意している。

家父長制度の持つ力

ジミー・カーター、合衆国第39代大統領（1977-1981年）、世界の平和と保健の促進のために活動するカーター・センター創業者

男性と男の子もいよいよ、ジェンダー平等において自分たちが果たすべき役割を認識し、人類すべての利益のために社会を再形成しようと努力している女性や女の子の活動と一緒に参加するべき時が来ている。

男性は社会を統治する多くの機関で権力を握っているが、それらの機関は現状の形を維持している姿勢を変えていかなければならない。

社会のほとんどは、男性権力者が命じた宗教的な教義によって形作られた。このため、男性優位を促進する態度や制度が普通になってしまったのだ。このような教義は、経典の中から女性が本質的に男性よりも劣っている、あるいは従属的であるような描写のある部分を抜き出して曲解した宗教指導者が生み出したものだ（注7）。このような家父長制度の中で、社会における暴力もまた、当たり前とされてきた（注8）。

私の母国であるアメリカ合衆国だけでなくほかの国でも、問題を解決する手段として暴力を受け入れている。犯罪に対処する際の死刑や集団投獄もその一例であり、外国における不当な、先制攻撃による正義にもとる戦争も然りだ。

社会構造の多くが暴力を前提として築かれており、これは家庭内における暴力の存在によって浮き彫りにされる。女性や女の子に対する暴力は、親密なパートナーによる暴力から名誉殺人にいたるまで、あまりにも頻繁に発生している。多くの国際条約に定められてい

るとおり、平等な人間としての尊厳は権利である。政治・宗教指導者が一步前に進み出て、女性や女の子に対する暴力はやめなければならないこと、その暴力によって社会が損なわれていることを、自らの影響力を活用して声高に伝えていってくれることが私の願いだ。今こそ、リーダーシップを発揮するべき時だ。

#BringBackOurGirls の活動

ブッキー・ショニバレ、ナイジェリアの人的資源戦略コンサルタント、アブジャの #BringBackOurGirls活動の戦略的チームメンバー

チボクの女子学生拉致を受けて、「#BringBackOurGirls」の活動は、罪もなく、身を守る術のない子どもたちを奪われるのはもうたくさんだという、主に女性や母親から成る市民の怒りの声に応える形で生まれた。

このハッシュタグは、すぐに広まっていった。拉致された女の子は自分の娘や姪、妹、隣人であったかもしれないと皆が気づいたのだ。世界がつながり、呼びかけに応えた。ソーシャルメディアを使う人が政府や国際社会、法的機関、ジャーナリスト、報道機関、有力者や政治家にもいたことで、メッセージは世界中の隅々まであつという間に届いた。呼びかけに応えた人々は、自分の顔と「#BringBackOurGirls」のプラカードが何らかの影響を与えると信じた。その影響力は強く、結束と支援はありとあらゆる国のありとあらゆる人々から集まったのだった。

著名人では、アリシア・キーズのような歌手からイギリスのデーヴィッド・キャメロン首相、合衆国ジョン・ケリー国務長官、彼の前任者ヒラリー・クリントン、合衆国ファーストレディのミシェル・オバマ夫人、十代のパキスタン人で教育活動家のマララ・ユスフザイなどが声をあげた。もちろん、ナイジェリア国内の著名人は言うまでもない。合衆国大統領バラク・オバマもこの声を聞き、状況を把握してアメリカ政府がどのような支援を提供できるかを検討するための専門家チームをナイジェリアに派遣している。『タイム』誌によれば、「#BringBackOurGirlsは、初めて使われてから2週間のうちに200万のコメントを集めた」とのことだ。

では、「#BringBackOurGirls」が本当に与えた影響とはどんなものだったのか？ 最初の興奮が静まると、人々はこう考え始めた。単なるハッシュタグが、どうやって本当に女の子たちを取り戻せるのか？ この活動による成功とは何を指すのか？ 結局のところ、女の子たちは行方不明のままだ。だが、中心的活動を率いてきたナイジェリア現地の活動家たちは、このハッシュタグが非常に大きな注目を集めたからこそ、会話はこれからも続くだろうと今も考えている。その注目それ自体が、変化を生むのだ。時間を経てこの活動は、女の子を返せというプレッシャーを与え続けつつも、暴力と偏狭の犠牲となる声なき被害者たちに対する共感と人間愛を共有できる収束点へと進化したのだ。

私たちはサイバースペース探索者にならなければならない

カタリナ・ルイス＝ナヴァロ、カリブ海生まれでメキシコシティに拠点を置くコロンビア人ジャーナリストでありフェミニスト

人類の歴史、文化および知識は、私たちの世界に対する見方を定義づけるひとかたまりの意義によって形成されている。これまで、歴史は少数の特権階級によって書かれてきて、人口の大部分は取り残されてきた。彼らは意義を生み出さないで、文化の創造に影響を与えないというわけだ。この大部分を占めるグループには表現の自由はあったがそれを行使せず、そのために特権階級グループが常に権力の座を維持し、同じ不平等や不当を繰り返すというパターンを永続させ、強化しつづけてきた。

私のキャリアの扉はインターネットによって開かれたが、そこに至るまでに、私は個人的にオンラインでのいじめや絶え間ないネット荒らし、組織的中傷、攻撃的コメントを経験した。インターネットは諸刃の剣なのだ。たとえば2013年にコロンビアのメデジンという町で、12歳の処女が暗証番号を要するウェブサイトでオークションにかけられていた。このような記事を書いて私は現実世界の脆弱性、暴力、男性優位性がバーチャル世界にも侵出していることを知ったのだ。人身売買に携わり、獲物を探し回っている同じ悪者が、ソーシャルメディアでも強力な存在感を示している。オンラインの安全性やデータを保護する習慣の不足に加え、危険を十分に認識していないことが、女の子を危険にさらし、脆弱にしている。

だが、女の子や若い女性である私たちは、「インターネットの餌食」でいることに甘んじていてはならない。私たちは「インターネットの探索者」となり、インターネットの敵意にすぐみあがるのではなく、インターネット上での存在感をもっと強めていくべきだ。力を手に入れ、闘う上で、先端技術の上手を取るのは重要な方法だ。デジタルメディアはコミュニケーションにも連帯にも、多様性、アドボカシー活動にも、女の子と女性の人権を守るためにも使えるのだから。

希望はまだある

ナワル・エル＝サーダウィ、作家、小説家、医師、そして女性の人権のための活動家

女の子が自信を持てずにいるのはその社会的・宗教的背景のためであり、幼いころから知性の発揮を制限されてきたからである。このため女の子は自尊心が低く、身体的にも心理的にも精神的にも弱い存在であると自覚するようになる。そうすると、命令に従い、考えなしに言うことを聞いてしまう。恥じらい、愚かさ、特定の美しさ、女性の優しさといった女性らしさのばかげた特徴を受け入れ、習得していくのだ。

私自身、そのために完全に自信を失い、自分の意思を見失っていたかもしれない。もし母

がいなかったら、同世代のほとんどの女の子と同じように、私も社会階層の最底辺で暮らし続けていたかもしれないのだ。だが母は、彼女自身の子ども時代の反抗心を部分的にどうにか維持し続けていた。自分自身の人生よりもましな人生をと、私のために願ってくれたのだ。母は私の耳にこうささやいた。「灼熱地獄なんてものはないのよ」

母は、私が大学に進んで医学を学ぶことを主張した。父が言うように私が家に残って母の料理を手伝ったりすることを拒否したのだ。母はすべての苦勞を引き受け、父と9人の子どものために皿を洗い続けることによる手荒れも引き受けた。それも、私が高等教育を続けられるようにだ。愛と結婚、離婚、そして母性というつらい経験を経て、私は両親にとっては普通だった文化と家父長制度、階層社会を克服した。私は母国の抑圧的な政府が押しつけたカリキュラムだけに勉強をとどめることはしなかった。それは学校だけでなく、社会全体についてもだ。自由に勉強を続けたおかげで私は成長し、進化し、男性性／女性性、心／体、天／地、神／悪魔、精神的／物理的、黒／白、支配者／被支配者、主人／奴隷などの対義関係がいかにもみせかけだけのものかに気付いた。未来にはまだ、薄れたり消えたりしていない希望がある。その希望は、世界中の若者の行動に反映されている。革命は分散しているが、まだ続いている。自由と独立、正義と尊厳という4つの目標を達成するべく、続いているのだ。

証明：女の子にとっての重大な問題と、変化のためのアイデア

「世界ガールズ白書」第1弾の発行以来、プラン・インターナショナルは女の子の権利と現実に関する証拠基盤を構築することに尽力してきた。プランは経年的調査「本当の選択、本当の人生」を開始し、9カ国で少人数の女の子の人生を2006年の出生時から追跡している。今、彼女たちは9歳になり、彼女たちの人生がプランの研究に光を当ててくれる。女の子についての証拠基盤はきわめて重要なもので、女の子の窮状と力に関する新たな見識とデータを世界中の代弁者や活動家にもたらしてくれる。また、女の子と男の子の長期的な変化を生み出すプログラムの情報源ともなる。そして、女の子の人生に関する現状を浮き彫りにするデータによって出資者を説得し、さらなる投資と政治的意志を促進してくれる。

今回の報告にあたって、プラン・インターナショナルは調査会社Ipsos MORIとの協働のもと、エクアドル、ニカラグア、パキスタン、ジンバブエの4カ国に暮らす4,219人の女の子についての調査も実施した。この調査では、過去におこなわれた調査「私たちの声を聞いて」で4カ国の数千人におよぶ思春期の女の子が人生においてもっとも逼迫した問題であるとして挙げた4つの領域に関する具体的な質問をした。続く今年の調査「女の子が上げる声」(注9)では、学校や地域社会におけるジェンダーに基づく暴力、早すぎる結婚と妊娠についての女の子の意見を聞いている。

「もし私に十分な知識があったら、妊娠しないと思います。知識がないから、早すぎる妊娠をしてしまうのです。今、私は19歳ですが、もう小さな娘がいます。いつも娘の面倒ばかり見えています。本当はもっと勉強したいのに」

パキスタンの女の子

さらに重要なのが、3大陸に散らばるこの4,219人の女の子に対して、彼女たちが直面する困難に立ち向かうためにどんなことができるか、それを本当に実現するために誰が主に責任を負うべきかという質問をしたことだ。パキスタンのある若い女性が述べた意見は、変化に向けた行動がどこから始まるべきか、誰が主要な役割を担うべきかを明確に示している。「女の子自身が、自分の人生において自分で決断するべきです。彼女たちはちゃんとした教育を受けて、政府や家族はそのことについて合意するべきです」。「女の子が上げる声」の主要な調査結果を精査すると、多くの地域で明確な共通認識が見られた。4つの異なる国の参加者がきわめてはっきりと、思春期の女の子が過去に比べてずっと地域社会で大事にされるようになってきていると応え、回答者の大多数である88%が、女の子は母親の世代に比べて人生における選択肢が多くなっていると応えた。

なるほど、進歩は見られる。だが、これも調査でわかったことだが、実際の女の子の人生はいまだに平等性と機会を大きく欠いている。4大陸のほとんどの女の子が、自分自身の人生を変えるような決断に関してほとんど力がなく、早すぎる結婚と妊娠を避けるための知識が不足していると答えた。また、本当は自分のために立ち上がりたいのに、そうするだけの自信が持てないとも語った。男の子と同じだけの機会を与えられていると感じている女の子は、わずか37%にすぎないのだ。

女の子の回答にはどれも、暴力または暴力に対するおびえが一貫して見られる。女の子は早すぎる結婚や強制される結婚が暴力のリスクを高める要素だと常に考えており、68%の回答者が、若くして結婚する女の子は家庭で暴力を受ける可能性が高いと答えている。

変化に責任を持つ

今回の調査を通じて、女の子が自分の人生を改善していくうえで責任を持つべきなのが政府や地域社会、宗教的指導者ではなく、自分自身や家族であると認識しているというのは特筆すべき事実だ。唯一の例外が、女の子を暴力から守る際に警察の役割が重要だという考えだろう。ジェンダー不平等を持続させる第一の要因が家庭であるという事実はしばしば無視される。家庭や個人の心の中という閉ざされた空間で起こっていることは当然表に出にくいものであり、したがって変えていくのも難しいのだ。プランが聞き取りをおこなった女の子はみな、このジレンマを抱えていた。自分自身のエンパワーメントを望んでいるが、声を上げて人々に聞き届けてもらい、平等な権利と責任を持つ完全な市民となるためには家族からの支援と尊敬が欠かせないのだ。

「女の子にはこうアドバイスをしたいです。両親と話をして。孤立を感じるから、語りかけてとお願いするようにと」

ニカラグアの女の子

答えを見つける

プランが第1級の証人として話を聞いた若い女性たちはみな、何かなされるべきかをはっきりと教えてくれた。では、いつも直面している不当行為に対し、彼女たちはどのような対応を求めているのか？

・女の子は、両親が自分ともっと話をして耳を傾け、支援してくれることを望んでいる。4カ国の女の子のうち53%が、妊娠した女の子に対する家族や地域社会からの支援を優先事項として挙げている。

・女の子は、暴力問題を地域社会や政府機関が認識し、対処することを望んでいる。全体の47%が、暴力や虐待を経験した際に信頼できる誰かに話をしたいと答えた。

「女の子には、虐待問題を気兼ねなく報告できるコミュニケーション手段が開かれているべきです。そして女の子は実際に、加害者の逮捕など、その問題の解決を見たいと思っています。そうすれば、ある程度は心が休まります。警察署では被害者に配慮するための部署を設けて、もっと女性職員を配置するべきです。被害者は、男性に気持ちを打ち明けにくいものですから」

ジンバブエの女の子

・早すぎる妊娠、早すぎる結婚とジェンダーに基づく暴力に関連して、女の子は学校、家庭、メディアにおける情報や会話を求めている。これは、どのような形の法律や政策の変化よりも高い優先順位をつけられた。

・教育プログラム、安全な空間、意識向上キャンペーン、タブーをやぶること、自信の構築、「沈黙をやぶって警察に通報すること」、そして、パキスタンのある女の子が言ったように、「自尊心についての教育」が、繰り返し叫ばれた。

・ジンバブエの女の子のうち64%が、若い母親に中等教育を修了する機会を与えることを優先事項として挙げた。

女性と女の子のエンパワーメントが持続可能な開発目標（SDGs）の将来的成功のカギとなるのなら、こうした声こそ、政策決定者や立法者の耳に届けられるべきだ。

「私は同年代の女性たちとの集会を組織し、女性の権利についてのデモ行進をおこないます。社会でタブーとみなされている事柄について情報が必要で、自由に話せるべきだと訴えるのです」

エクアドルの女の子

総合的に見ると、女の子の人生と彼女たちが直面する困難に対する解決策が浮き彫りにするのは、構図の複雑さだ。手元に集まった証拠の多くが、現実に存在する格差を示しており、誰について、誰と話をしているのかを本当に理解することの重要性を示している。すべての女の子に権利があるが、それを実現するための道筋は一人ひとりの階級、年齢、住まい、家族、障がいの有無、性的指向によって異なる。プランの調査からも、国による違いもあれば、国内の地域による違いもあることは明らかだ。大きな変革をもたらすためには、差別という事実そのものと同じくらい、差別が生まれる背景を理解することが重要かもしれない。

Because I am a Girl～女の子だから～

今年、報告書から聞こえてくる声は希望と新たな機会、女の子の人生における変革の可能性について語っていた。マリアン・パールのこの言葉は、多くの思いを代弁している。「何百という女性と女の子の物語を読み、聞き、目撃した中で、必ず見られたのが変化を求める強い意志だった。それはときに大きな個人的犠牲を伴ってでも、ほかの人々のために変化を望むほどのものだ。今起こりつつある変化は、女性と女の子が自分の人生と自分の体、自分の物語に対する権利を主張するという、まさにかつてないほどの変化なのだ」

特効薬や世界共通の解決策などというものは存在しない。だが進歩は確実に見られていて、今後数年のうちに私たちは声を上げる女の子に耳を傾けることができるだろうし、そうすべきだ。プラン・インターナショナルでは今後、女の子の権利について女の子と女性、男の子と男性とともに活動していくことを誓う。彼らとともに運動を起こし、彼らのニーズや意見を考慮し、彼らが明白に重視している教育を優先するプログラムを策定していく。

「Because I am a Girl～女の子だから～」はいまや変化の旗印であり、女の子が教育や食事、尊敬を十分に与えられない理由ではもはやないのだ。2007年、ネパールの15歳の女の子が教えてくれたのは、彼女がどれだけがんばっても、両親は「私の男兄弟しか大事にしない」という事実だった。これからは彼女の娘を含む世界中の女の子が、そのような思いを口にしなくてもすむ時代が来るよう、私たちは努力していかなければならない。

(脚注)

- 1 Gakidou, Dr emmanuela, Krycia Cowling, BS, Prof Rafael Lozano, MD, Prof Christopher JL Murray, MD. 「Increased educational attainment and its effect on child mortality in 175 countries between 1970 and 2009: a systematic analysis (1970年から2009年間の175カ国における学業成績の向上と小児死亡率に対するその影響：系統的分析)」、『the Lancet』誌 第 376 号 (2010 年 9 月 18 日) 、
[http://www.thelancet.com/pdfs/journals/lancet/PiiS0140-6736\(10\)61257-3.pdf](http://www.thelancet.com/pdfs/journals/lancet/PiiS0140-6736(10)61257-3.pdf)。
- 2 Every Woman every Child. 「Saving Lives, Protecting Futures: Progress report on the Global Strategy for Women’ s and Children’ s Health 2010-2015 (命を救い、未来を守る：女性と子どもの健康に関する世界戦略の進捗報告2010年—2015年)」、Every Woman every Child、2015年。
- 3 UNESCO. 「Education for all Global Monitoring report 2015: achievements and challenges (万人のための教育 (EFA) グローバルモニタリングレポート2015：達成事項と課題)」、UNESCO、2015年。
- 4 UNESCO, GMR and UIS. 「Progress in getting all children to school stalls but some countries show the way forward (すべての子どもを学校に通わせる活動の進捗は停滞しているが、一部の国が前進する方法を体現している)」、UNESCO、GMRおよびUIS、政策文書14/概況報告書28、2014年6月。
- 5 インドラ・ヌーイの発言より引用。
- 6 UNESCO. 「Education for all Global Monitoring report 2013/14. Teaching and Learning: achieving Quality for all (EFAグローバルモニタリングレポート2013/2014、教えと学び：万人のための品質を実現する)」、UNESCO、2014年。
- 7, 8 Carter, J. 「a call to action: religion, women, violence and power (行動の呼びかけ：宗教、女性、暴力と権力)」、ニューヨーク、Simon and Schuster、2014年。
- 9 調査報告書の全文については、plan-international.org/girlsを参照。